

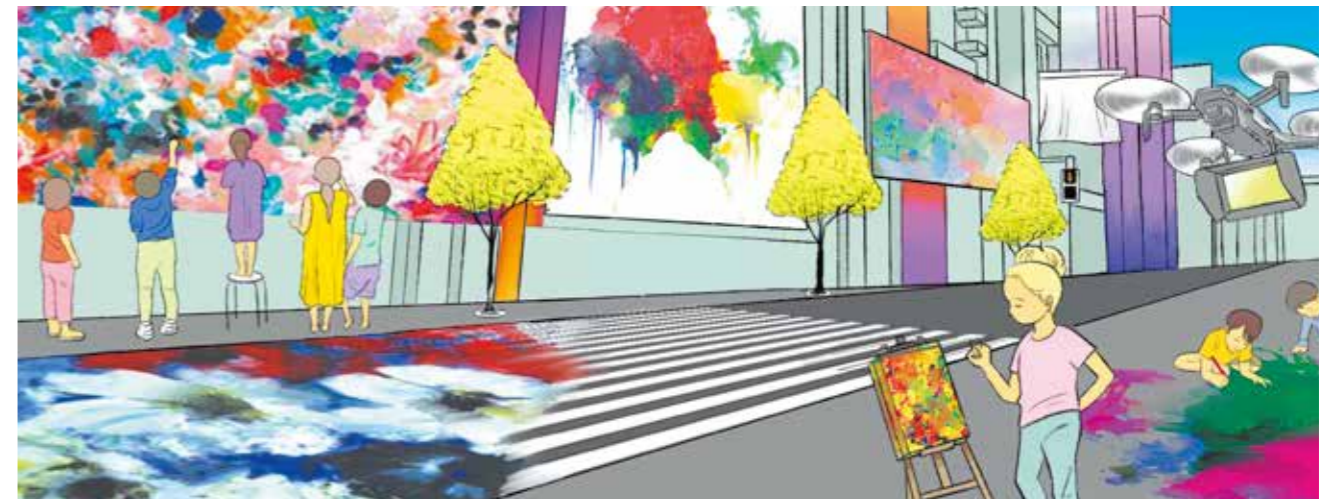
こども未来都市宣言

~The child growth is the best work of life~

転機

FUKUOKA 2022

こども未来都市宣言 | WEB サイトはこちら▶



福岡の未来への提言

子供達の可能性を大きく開花させるまちへ

一般社団法人福岡青年会議所 理事長
西嶋 聖



アジアに向けて開かれた国際都市・福岡。

福岡は、古くからアジアの玄関口として様々な地域の人びとが行き来し、交流を育んでいくことで発展してきました。

しかし、未だかつてない先行きの見えない情勢においては、新たな生活様式や交流方法など、強制的に新様式を受け入れざるを得ない状況になっているといえます。

福岡には多様性を受け入れる風土や、イノベーションを起こすための積極的な行政の施策など、多くのポテンシャルが存在しています。

福岡のポテンシャルをより高めていくには、多くの人財を育て輩出していくことが求められます。

そのためには、福岡に住む子供達が、様々な分野で大きく成長し活躍できる環境を作る必要があります、私たち福岡青年会議所が実現していくべき役割を見出していかなければなりません。

「これからの福岡を支えるのは、子供達である。」

今を生きる私たちは、次世代を担う子供達が秘めている可能性を大きく開花させるため、行動していく責任があり、次世代の主役である子供達のために、この提言書を通して未来への新たな挑戦をしていきます。

目まぐるしいスピードで変革を余儀なくされる時代において、福岡を支える子供達の輝かしい未来を創造するため、私たち福岡青年会議所は「こども未来都市宣言」～The child growth is the best work of life～をここに提言いたします。

福岡青年会議所とは？

よりよい福岡の「人づくり」「まちづくり」を通して“明るい豊かな社会の実現”を目指す組織です。次代のリーダーとしての責任を自覚する、20歳から40歳までの若者が集い発足から70年あまりの長きにわたり様々な活動を行ってきました。

青年会議所運動とは「修練」「奉仕」「友情」という三信条のもとに率先して行動する仲間たちによって起こるものです。日本全国684の地域で約32,400人、また全世界で117ヵ国、約165,000人の青年経済人が活躍しています。(2022年1月現在)

日々の活動を通して、社会・地域をリードする立場の者同士で切磋琢磨し、地域・国内・世界で活躍できるリーダーとしての能力を磨いています。

福岡青年会議所 過去の事業

1953年に結成された福岡青年会議所では、これまで様々な事業を行ってきました。数多くの事業の中から、一部をご紹介します。



プロ野球誘致活動

西鉄ライオンズの移転により失われた活気を取り戻そうと、福岡JCが率先して1987年にスタートしたプロ野球誘致活動。署名運動やテレビ番組でのPR活動を通して福岡市民の想いを伝え続けたことが実を結び、福岡の地にホークスが誕生しました。その後も優勝祝賀パレードの警備などでも関わりを持っています。



アジア太平洋こども会議 イン福岡

アジア各国の子どもたちが言葉や文化の壁を越えて交流し、国際人への道を開く「アジア太平洋こども会議」。この巨大イベントも1989年に福岡JCがスタートさせたもの。参加した子どもたちの多くが現在、世界中で活躍しています。



NAKASU JAZZ

2009年、中洲の活性化を願い、福岡JCが想像したプロジェクト。世界中から有名アーティストが集集、国内外から多くの人が集まる音楽イベントです。現在は実行委員会を主軸とし、福岡JCも結束して支援を行っています。

もっと想いをぶつけよう！！

皆さんは、福岡に何年住んでいますか？

これからもずっと住み続けていきたいですか？

ここ数年の福岡の街の成長は凄まじく、インバウンドによる経済発展、人口増加、天神ビッグバンによる土地開発などによって、とても目まぐるしく変化を続けています。

これからもまちの発展は続いていくべきです。

「現状維持」は「衰退」の始まりといわれる世の中。

新たな時代に合わせて我々もまちも変わっていくべきです。

そのために様々なことを学び、行動していく必要があります。

しかし、光が当たらないところはないでしょうか？

経済発展の裏で、衰退している産業、消えていく伝統や文化、守られていない権利。

この分野をもっと便利に、この分野をもっとおもしろく、この分野をもっと元気に。

私たちが声を上げて活動すれば、福岡のまちはもっとワクワクするような未来へと進んでいきます。

これからも大好きなまちに住み続けるために。

ここが私の故郷だと、世界に誇れるまちにするために。

あなたのオリジナリティ溢れる発想がまちに届いたとしたら、どんな未来が待っているか、ワクワクしませんか？

さあ、私たちと一緒に声を上げ、活動していきましょう！

こども未来都市宣言

福岡はアジアのリーダー都市として、存在価値を高めています。

まちとしてのさらなる成長をしていくためには人材を育成し、福岡の経済、芸術文化、学業、近未来産業などで活躍すべく輩出していかなければなりません。

これからの社会を支える子供達が、福岡のまちで、さまざまな分野で大きく成長し活躍できるような環境を作る必要があります。

私たちは、その将来を支えていく子供達の得意な分野を伸ばし、プロフェッショナルへと導いていく礎となります。

また、その子供達の能力を発揮できる場所や環境を準備することで、可能性が開いた子供達が福岡のまちで活躍していくことができます。

そんな魅力的なまちには、九州からだけでなく、日本中、アジア諸国からも多くの子供達に移り住み、さまざまな文化が混じり合うグローバルシティになります。

子供達の可能性を飛躍させるまちとして、世界中から注目され、

ハイ・スタンダードなまちづくりは福岡の教育を底上げします。

我々青年会議所だからこそできる人財育成や環境づくりを提言します。

グローバルシティ

アートシティ

アーバン
スポーツシティ



未来に向けてのインタビュー

福岡地域戦略協議会 事務局長

石丸修平氏

1979年10月生まれ、経済産業省、PwC等を経て、2015年4月より福岡地域戦略推進協議会 事務局長に就任。中央省庁や地方自治体の委員など公職も多数務める。2021年10月には「破壊的変革を導く世界で最も影響力のある50人」Agile50に選出。



司会:この度、福岡青年会議所は「子ども未来都市宣言」を策定し、提言を行うことになりました。本日は、5年後10年後の福岡において、特に将来を支える子ども達がより活躍できる環境について、お話を伺いたいと思います。

福岡市でこれから必要となる「テーマ」や「キーワード」はどんなものがあるのでしょうか？

石丸:私は「ウェルビーイング」だと思います。人はそれぞれに幸せな形というのがあり、それは「こういう幸せが適切だ」と押し付けるものではありません。子どもから大人、高齢者まで、自らがどういった時に幸せだと感じるのかを一人ひとりが大切に、実現に向け歩を進めていく。また周囲もそれを尊重し受け入れる社会をまちとしてつくっていく。そういったことが大事だと思います。

橋田:僕も「ウェルビーイング」と思っていました(笑)コロナ禍で皆さんの考え方が変わり、何をもって幸福と思うのか。高いものを買って心の満足度を高めるというものではなく、気持ちの満足度をどう高めていくか、そのような変化を感じますよね。例えば社会参画や、SDGsの取り組みに何か行動を起こすとかで自分が幸福を感じる。といったものがこれから大事だと思いますね。

福岡市議会議員(福岡青年会議所 OB)

橋田和義氏

1971年2月生まれ、2011年福岡市議会議員(中央区)初当選「市民と議会の架け橋」をスローガンに、現場に足を運び、市民の生の声を聞き、市民に今何が必要なのかを第一に考え「安心・安全なまち福岡」の実現を目指し6つの政策を主軸に日々活動。



「子ども」というテーマで、「まちにこれから必要なもの」などお考えはありますか？

石丸:子どもたちが思い描いた夢ややりたいこと、あるべき姿をその子たち自身で実現していけるような、そういったまちがいいですね。それは、学びにしても遊びにしても、大人達や周辺環境などからもたらされる刺激が多様であって、それらを踏まえて自らの意見や考えが形成され、そこで形づくられた思いや情熱に基づいて自分を表現したり夢に向かって実行したりできるまちというのは素晴らしいなと思います。

そのためには、生活の安定はもとより、色々な学び、安全に遊べる環境整備も大事になると思いますね。

橋田:石丸さんのお話に全てが出ていていると思います。やはり、いろんな事件とか事故が起きている中で「安心安全」は特に担保しなくちゃいけない。お父さん、お母さんが安心して子育てが出来る環境、例えばベビーカーを押しやすい道路を整えるとか。そういった意味で子どもを中心としたまちづくりをこれから考えていきたいと思います。

石丸:おっしゃる通りで、「子ども中心のまちづくり」は一つのキーワードだと思います。子どもが安心安全に暮らせるまちは、大人にとっても「安心安全に暮らせる」まちだと思います。

「グローバル」な目線では、子ども達にはどんな環境があったほうがいいとお考えですか？

橋田:観光が再開されるとたくさん外国人観光客が来る、英会話を実践する場としてはそういった海外から来られた観光客の方たちと子どもたちが触れ合う場を積極的に作るというのがかなと。子どもにとってそういう経験というのは活かされるし、それがきっかけで海外に行こう!ということになると思う。

石丸:そうですね。実践していくという意味では、英語を学ぶだけではなく、英語を使って表現するとか、考える、討論するといったことはこれからますます大切になってくると思います。「アジア太平洋子ども会議・イン福岡」のような、海外の子ども達を受け入れて、接点をつくっていくような取り組みは好例だと言えるでしょう。また、MICEでやってくる海外の方々のご案内やおもてなしを一般から募ったボランティアに担っていただくことが多くあり、こういった場面で子ども達が関わり、英語を実際に使う機会を作っていくだけでも素晴らしいチャレンジだと思います。

例えば、国際金融機能誘致のために産学官で組成したTEAM FUKUOKAで高島市長が中心となって誘致した

「CURIOOkids」という香港の企業(アフタースクール事業)があります。英語で学ぶだけでなくコミュニケーションはもとより、アントレプレナーシップ、クリエイティブデザイン、テクノロジーなど様々なことを学べるグローバルな塾のようなもので、現在世界35か国で展開しており、日本で初めての進出先として福岡が選ばれました。

これをきっかけとして、子どものころから外国人とコミュニケーションができたり、一緒に世界の最先端の教育を学ぶことができるといった「グローバル」目線での地域環境も、今後福岡において整っていくのではないかと思います。

子ども×アートの相乗効果として、どのようなものを期待しますか？

橋田:うちには6歳の娘がいて、将来の夢は「お絵描き屋さん」になるって、いつも絵を描いて、何かを拾ってきては工作している。こういったところから創造力とかが育まれるんだろうと思う所はありますね。今は受動的なものが多いですね、スマホで動画を見る、テレビを見る、それってたぶん自分から発想したり創造したりするのを打ち消したりしている。

石丸:感性を育むという文脈で、そういった様々な作品などに小さな頃から触れるとか、作品とかアートの重要性・必要性みたいなものをしっかりと伝えるといった教育は、とても重要じゃないかと思います。もう一つは、アートは職業選択の一つにもなると考えています。アーティストになりたいという子ども達が増えてくるまちって素敵だと思うんです。

私も先日「アートフェアアジア福岡」に行って、作品のストーリーをたくさん伺いました。特に今回のフェアはアジアのアーティストが多く参加されていることもあって、社会に対して感じている課題を表現していたり、様々なストーリーや社会的メッセージがある作品が揃っていて、アートとの触れ合い方は多様だということを感じさせていただく機会となりました。アーティストからすると自己表現する場でもある訳ですから、子ども達にとってもアートに触れることでも社会的なものも含めた問題意識を持

つきっかけにもなると思いました。
橋田:地域みんなで、アートを地域と一緒に盛り上げていこうよというのは、東京とか京都のアートフェアではやってない。それをギャラリーの皆さんは、福岡はすごいって、行政もこれだけ一緒になって、まちも一緒になって盛り上げてくれるんだって、福岡は本当に可能性があると思う喜んでくれていましたね。今回のアートフェアでは結構売れてもいて、来年もすごく楽しみです。

スポーツに関してはどのようにお考えですか？

石丸:スポーツに関しては国でも議論されています。部活などは学校や教員の負担が大きいこともあり、放課後のクラブ活動をどの様に捉えていくのか。地域に移行していくべきではないか。いずれにしても身近なものでなければならぬので、学校というのはとても重要な要素になります。例えば、アビスパの選手やOBがサッカーを教えたりする形が始まっていますが、そういった子どものスポーツ環境にクラブや様々な担い手が関われる仕組みや、やり方が広がってほしいと思います。プロから学んだ方が価値が高かったり、安心・安全だったりといった点も重要な要素ではないでしょうか。この点は国の関わりが大変大きな要素を占める場所です。注視したいと思います。

橋田:議会でも部活動問題を取り上げたことがあります。地域の、プロスポーツの人が教える流れは、教員の負担軽減、子どもたちの能力向上の意味において、当たり前になってきていると思います。僕自身、運動が

大好きで運動がもたらすことは肉体的なこととは勿論だけ精神的にも向上していくことを感じることがあります。実は、僕は極真空手の大会会長をやっているんですが、大会では幼い子の1対1の真剣勝負を見るんですよ。すごく痛いんだろうけど、勝ったときの嬉しさ、負けたときの悔しさを経験するのは、相手を思いやる気持ちや、生きる力を見につける、とても重要な機会だと思います。ずっと不登校で学校に行けなかった子が、空手を始めて、自信を持って学校に行けるようになったという話を聞いたときに、素晴らしいなって思いましたね。

今後の福岡の可能性を教えてください。

石丸:福岡は近年、生活環境の良さや自然との近接性などをベースに、オープンでダイバーシティなまちとして、日本の中で極めて優位性があるまちになってきたと思います。この度、福岡青年会議所が提言「子ども未来都市宣言」を策定されたとお聞きしましたが、FDCでも心掛けてきたのは、その良さは変えない、維持しながらも、より経済の活性化に繋げていくとか、社会課題の解決に繋げていくという動きを進めていくという事です。

今回、子どもというテーマが挙げられていますが、そのような環境を踏まえた次の一手として、高島市長がウェルビーイングという柱を掲げられました。まちの成長を促し、持続可能性を高め、人々のウェルビーイングにつなげていく取り組みがこれから加速していくと思います。FDCも産学官民が一体となって、しっかりと役割を果たして行きたいと思います。



グローバルシティ



福岡は古くから「アジアの玄関口」として、日本とアジアの商取引の窓口の役割を担ってきました。社会や経済のグローバル化が進み、「アジアのリーダー都市」を目指し持続可能なまちづくりをする福岡において、諸外国との交流ができる環境を充実させ、商取引だけでなくスポーツや文化における交流、外国人留学生の受け入れや、世界で活躍できる人材の育成をしていくことが重要です。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、諸外国との行き来が難しくなり、リアルでの国際交流の場が失われています。

交流を制限された子どもたち、リアルな国際交流を知らない子どもたちが、今後の福岡のまちを「アジアのリーダー都市」からさらに「アジアNo.1都市」に推し進めていくためには、リアルな国際交流をすべきだと考えます。

「オンライン」「ハイブリッド」「非対面」などによってウィズコロナ、アフターコロナにおける国際交流は確かに可能です。

しかし、これからの国際社会を支える子どもたちにとって、国際交流がオンラインばかりになることが当たり前になってしまい、リアルな触れ合いができなくなってしまうことにはマイナス面が存在します。

福岡にない文化や先端技術を実際に触れることで、日本と諸外国との環境の違い、文化の違い、

良い点と悪い点など見て感じることができ、グローバルな考え方や視野が広がります。

アフターコロナの時代だからこそリアルな国際交流にこだわり、その大きな機会づくりに

チャレンジしていくことで、より国際意識の高い子どもたちを、福岡のまちを

「アジアNo.1都市」に推し進めていく人財として育成していく必要があります。

提言 内容

世界へ羽ばたけ!グローバルシティ

子供達はリアルな国際交流を通して、日本と諸外国の環境や文化の違いを実際に見て感じるすることができます。このような経験をすることにより、グローバルな考え方や視野が広がり福岡のまちを「アジアNo.1国際都市」に推し進めていく人財を育成していくことができます。

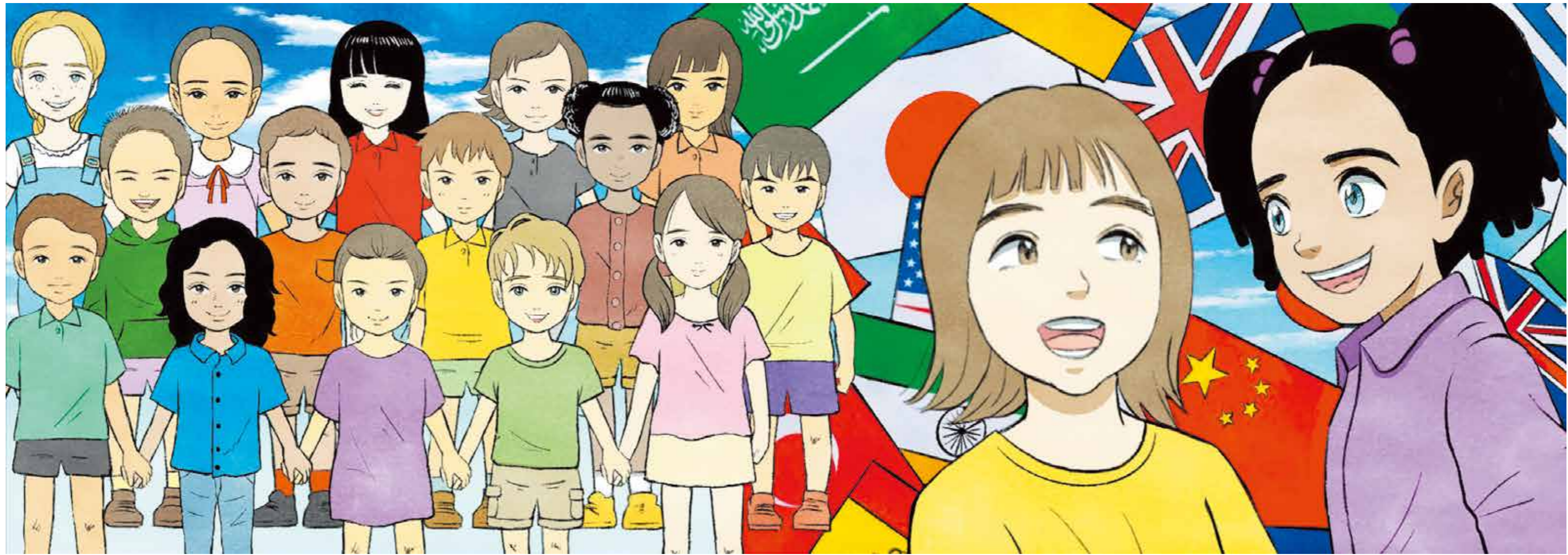
2020年から小学校でも英語授業が取り入れられましたが、現代の学生は中学から高校卒業まで6年間程度、受験英語の勉強をしています。では、海外の旅行者が地図を見て困っている姿を見て、声をかける人がどれくらいいるのでしょうか？グローバルというのは、国籍を越えて会話できることが前提となると考えます。海外の人とコミュニケーションをとることで、日本にない新しい価値観に触れ、新しい発想を生み出す力につながります。

益々早くなっていく世界のグローバル化のスピード。

「アジアの玄関口」である「福岡」において、子供達が世界中と接点をもてるよう留学やホームステイの支援の充実や万博のような国際的なイベントなど、子供達が幼いうち、若いうちに海外へ渡航し異文化に触れる機会を、まち全体でつくることができます。子供達が楽しみながら実践を積むことができる福岡のグローバル文化は、5年後、10年後の福岡の経済を大きく飛躍させ、「アジアNo.1国際都市」として世界から注目される国際都市へと成長させます。

芸術や文化、産業など様々な分野で、海外や福岡の魅力に触れた子供達がまちの経済を支え、また海外へはばたき活躍する。そして、海外で福岡の魅力を発信する。

海外進出で各国の最先端の技術や文化を身につけた若者が、今度は福岡に戻ってきてさらに新しい技術や文化を生み出す。このような海外まで広がる人財の循環、経済や技術、文化の循環ができるようになり、未来の福岡はとても魅力的です。



～「グローバル」が当たり前前のまちFUKUOKA～

アジアのリーダー都市として、「英語」、「スペイン語」、「中国語」など、バイリンガルやトリリンガルを福岡のニュースタンダードにしていきます。

活発な交換留学をまちをあげて推進し、外国から福岡へ来た子供達との交流はもちろんのこと、福岡から様々な国へ留学する機会を子どもたちに与えることで、子供達の海外への意識を引き上げ、外国語の学習への意欲を高めていきます。

学生たちの少数派の選択肢であった留学は、今までと違い皆が経験するようになり、いつしか小学生でも行けるようになるでしょう。

実際に海を渡り海外へ留学し、世界への好奇心が高まった子供達のチャレンジ精神は福岡に大きな波をおこします。

将来の進路の選択肢が広がり、子供達の可能性も大きく膨らみます。

世界中との交流なしでは、今まででは考えることができなかった大きな世界観での発想でたくましく生き抜いていきます。

高いレベルでの国際交流がスタンダードになった福岡では、様々な国々の文化が交じり合い、それぞれを尊重しあう姿をみることができるでしょう。

福岡の成長した子どもたちは国際交流を通じて学んだ大きな世界観でビジネスモデルを描き、世界に名を轟かせるようなグローバル企業を誕生させ、経済成長を牽引していくでしょう。そして、様々な文化に触れることで多様性を受け入れる土壌ができ、いち早くダイバーシティを実現するまちへと変わっていきます。

短期:交換留学、ホームステイ

福岡市でいえば、オークランド市(アメリカ合衆国)、広州市(中華人民共和国)、ポルドー市(フランス共和国)、オークランド市(ニュージーランド)、イポー市(マレーシア)などと姉妹都市締結を行っており、また、JCI福岡においても釜山JC(韓国)、サウスサイゴンJC(ベトナム)などと姉妹JC締結しているため、このネットワークを活用して、子供達の交換留学やホームステイを積極的に支援し、国際交流を増やしていく機会を作ります。

中期:中学校における海外修学旅行、英語弁論大会の定期的な開催

福岡市では、中学生から海外へ修学旅行に行くようにします。また、英語弁論大会を開催することで、英語学習の目指すべき目標をつくり、小学校からの英語学習に積極的に取り組む環境をつくります。より実践的な国際交流の場を楽しむことで、以降の英語の勉強が意欲的にステップアップします。

長期:令和版よかとぴあ開催

アジア太平洋博覧会FUKUOKA万博～令和版よかとぴあ～を開催します。「よかとぴあ」は、1989年に福岡市政100周年を記念して実施されたイベントです。それから約40年の時を経て、各国の現代の文化や技術を披露するブースやステージでの演出は、次世代の子供達に海外と触れる機会を実現します。

交換留学やホームステイを経験した学生がボランティアとして活躍し、外国の方々に今度は福岡の魅力を知ってもらう機会にします。グローバルな体験ができるとともに、福岡の地で新たな海外の文化や技術を体験することができます。

子供達は、よかとぴあで作った思い出を、さらに数十年後の子供達へと繋ぎ、さらなるグローバルシティへとステップアップするでしょう。

アートシティ



昨今、ITやバイオ、化学分野の目まぐるしい成長、コロナやウクライナ侵攻など過去には考えられないような激しい情勢の変化が起っています。

Volatility = 不安定

Uncertainty = 不確実

Complexity = 複雑

Ambiguity = 曖昧

「VUCA」という今日の世界の状況を表す言葉がよく使われております。

これは、今までの「分析」「理論」「理性」を軸とした判断が正解ではなくなっているということです。

「数値データで答えを出す」ことは、「AI技術が発展していく」ことでデータそのものの価値が下がっていきます。

技術進歩が目覚ましい現代だからこそ、個々の感性や直観、判断力がより重要になってくると考えます。

私たちが子供達の時代に評価尺度の不明な担任の先生に点数を付けられ、

喜んだこともがっかりしたこともあったのではないのでしょうか。

アートというものに関しては、評価が非常に難しく

何をもって判断する事がいいことなのかは非常に難しいものと言えます。

ダイバーシティな世の中において、豊かな感性を育むことが世界的に注目され始めた現代だからこそ、

これまでの画一的な価値基準では測れない才能をより高く育むことができる環境をつくることは、

つまり、「アート」に触れる機会をつくる必要があります。



提言
内容

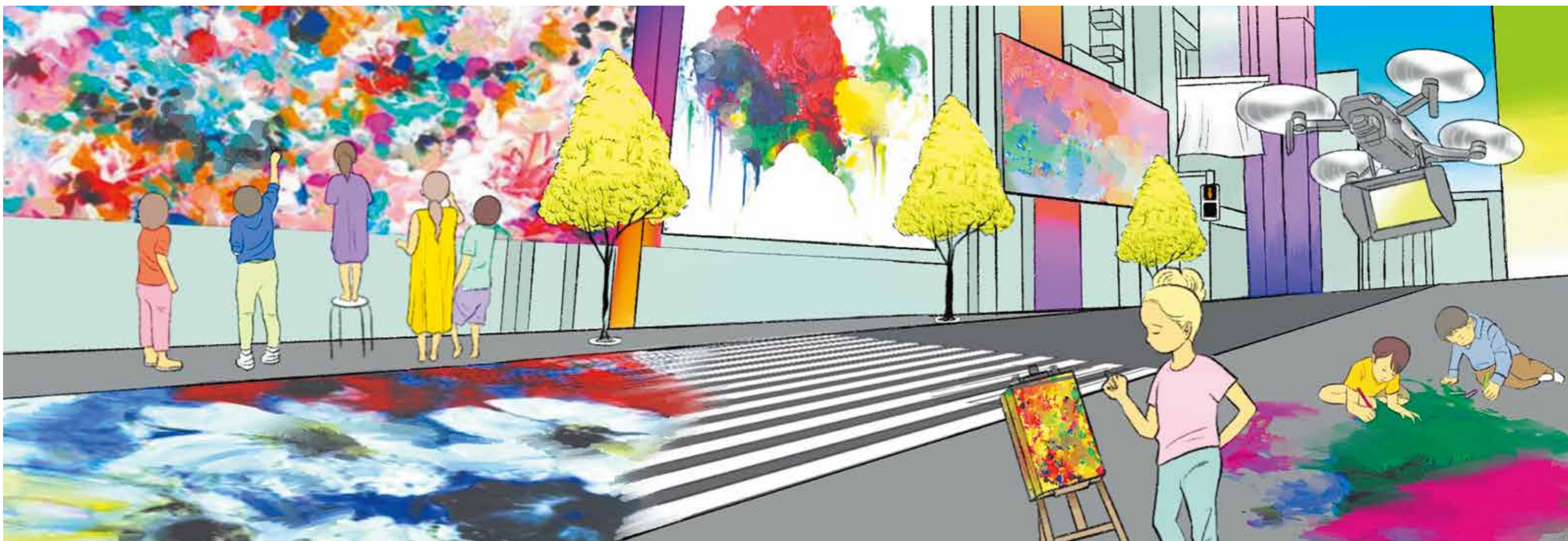
豊かな感性を育むアートシティ

「他人の評価を気にしない」「自分の好きなものをつくる」という子供達の自由な想像力・創造力を形にするために、ペンキや絵具、紙や木材など自由に材料を使って、大人の価値基準がない場所でアートをつくることができます。

学校の授業でしか描くことのなかったアートを身近な場所で描く機会や描くことについて学ぶことの機会を増やしていく必要があります。アートが身近な存在となるために、地域の公民館で子供達のアート教室を行います。そろばんや習字、空手など色々なことが安価に学べる公民館に子供達がアートを学べる教室は多くありません。描くことが身近になり好きになることで、うまく描くことだけがゴールではなく、能動的にアートに触れ、自由に描きたいと思いを、実際に表現できる場が必要だと考えます。

また、それだけにとどまらず、地域の小学校や公園にも子供達が絵を描く機会をつくっていきます。消せるペンキで各学年の子供達が描いた絵で埋め尽くされた公園が毎月変わるようになり、親や親戚にそれを見せたり自慢し、子供達の喜びの機会や自分が描いたアートがまちに存在するという気持ちが育ったまちに、より大きな愛着をもつことができるようになります。アートを愛する子供達は皆、育ったまちを愛することができ、福岡に行けば、自己表現をすることのできるまちとして、活気のある子供達が溢れ、まちは活気に満ちていきます。

アートで学んだ自己肯定感や感性・直観力(センス)は大人になっても生き続け、福岡でアートと共に育った子供達は、大人になってもアートだけでなくビジネスにおいても活躍すると言われるようなまちにしていきます。



～「アート」が溢れるまちFUKUOKA～

子供達の豊かな感性を育むために、アートに触れる機会を増やします。自由な発想で描くことのできる環境を増やすために、前述のフリーアトリエを中心に描くことのできる場所を提供していきます。子供達の未来のために、画材を提供していただく「福岡子どもアート応援企業」を募ります。参加企業はロゴを使うことができ、企業価値を高めます。

数多く自由に描く経験や楽しみを積んできた子供達に、次は見る機会を増やします。福岡のまちにアートを増やすことはもちろんですが、子供達と感覚の近い中高生をメインとした全国中学校・高校アート選手権大会「アート甲子園」を開催することでアートへの関心を更に高めます。また見るだけでなくその絵の時代背景、作者の心情まで深掘りして伝えることで、鑑賞の面白さを伝えます。そして子供達自身が自分でどの絵が好きか、そして何故好きなのかと言語化できるようにします。

そして、2030年、自由な発想で描き続け、多くのアートを深く理解し数多く鑑賞することで美意識、美的センスを鍛えた子供達の才能は大きく開花しました。あのビルも、あの一軒家も、あの高架線や公園も、若手アーティストたちによって彩られ、アートスポットとして存在感を放っています。若者たちは賑わいながら自分達のSNSにアップする映え写真を撮るためにいたるところで行列をつくっています。まちには活気が満ち溢れ、若者たちの目には未来への展望を見据えて輝いています。

短期:アートに触れる機会増

公民館でみんながアートを楽しめる教室を増やします。(美術大学出身の方を先生にする)子供達の身近にある公民館に、習字やそろばんのように気軽に学べるアート教室を増やしていきます。そのうちに、アートに力を入れた小学校が出てくるでしょう。子供達の豊かな感性を育むために、アートに触れる機会を増やします。アートへのハードルをまちとして低くすることで今までアートに触れてこなかった子供達に機会を増やし、日本で一番の感性豊かな子供達を増やしていきます。

中期:見せる機会の提供

アートを身近に感じた子供達が次に求めることは表現をする場です。学校での授業という枠を超え、市民一般に見てもらい達成感・高揚感を得てもらうために取り壊し予定のビルなどを子供達でアートします。ここで得た経験は、アートへの関心をさらに高めます。アートがあることが日常になり、感性が磨かれ始めます。作品価値が評価される環境をつくるため、現代アートやその他芸術を披露する機会をつくり、芸術家や就職への登竜門をつくります。

長期:アートからはじまるまちの発展

アートを通じて磨かれた感性を持った若い経営者が今までにない新たなビジネスモデルを考え、ベンチャー企業が次々と誕生する。まち全体がアート・芸術に溢れます。そして、美術館のようになった福岡では、建築物等がスタイリッシュに彩られ感性豊かな外国人の移住先としても人気のエリアになり世界中から優秀な人材が集積し、ベンチャー企業が更なる成長を遂げ、ユニコーン企業へ成長します。

アーバンスポーツシティ



運動のできない子供達が増えています。

ICT機器の充実や普及は人々に便利で快適な生活をもたらしましたが、それに伴う座位時間やスクリーンタイムの増加が心身の健康に悪影響があるとされ、とりわけ子供達・青少年の運動・スポーツ習慣や健康とスクリーンタイムとの関連については社会問題のひとつとなっています。

さらに、新型コロナウイルス感染拡大によってICT機器などのメディア利用率、在宅率が大幅に増えました。外での遊びを制限され、ゲームを通して友達とコミュニケーションをとる形が、放課後の遊びの定番となりつつあります。これからのアフターコロナにおいては、外で遊ぶのではなく、室内で遊ぶことが中心となり、子供達の体力・運動能力の低下が懸念されます。

また、最近では、ボール遊びを禁止する公園が増えているのも実情です。キャッチボールやサッカーなどが禁止され、気軽に球技をする機会を失われており、

従来は当たり前に見ることのできた公園の使い方についても大きく変革が生じています。

上下関係が厳しくヒエラルキーが根強い伝統的なスポーツのみでなく、若者たちに「カッコいい」「楽しそう」と思えるスポーツとして、東京2020オリンピックでは「アーバンスポーツ」を五輪種目に採用されました。スケボーやBMX、スポーツクライミングで10代の男女がメダル獲得や入賞を果たし、日本中でアーバンスポーツに注目させる活躍をしたことは記憶に新しいです。

福岡ではアーバンスポーツ(スケボーやBMX、スポーツクライミング)をする環境が十分に足りているとは言いがたいです。これからの多様性の社会において、子供達は様々なスポーツに挑戦する環境があり、自らの可能性を切り拓く機会と環境づくりをしていく必要があります。



提言 内容

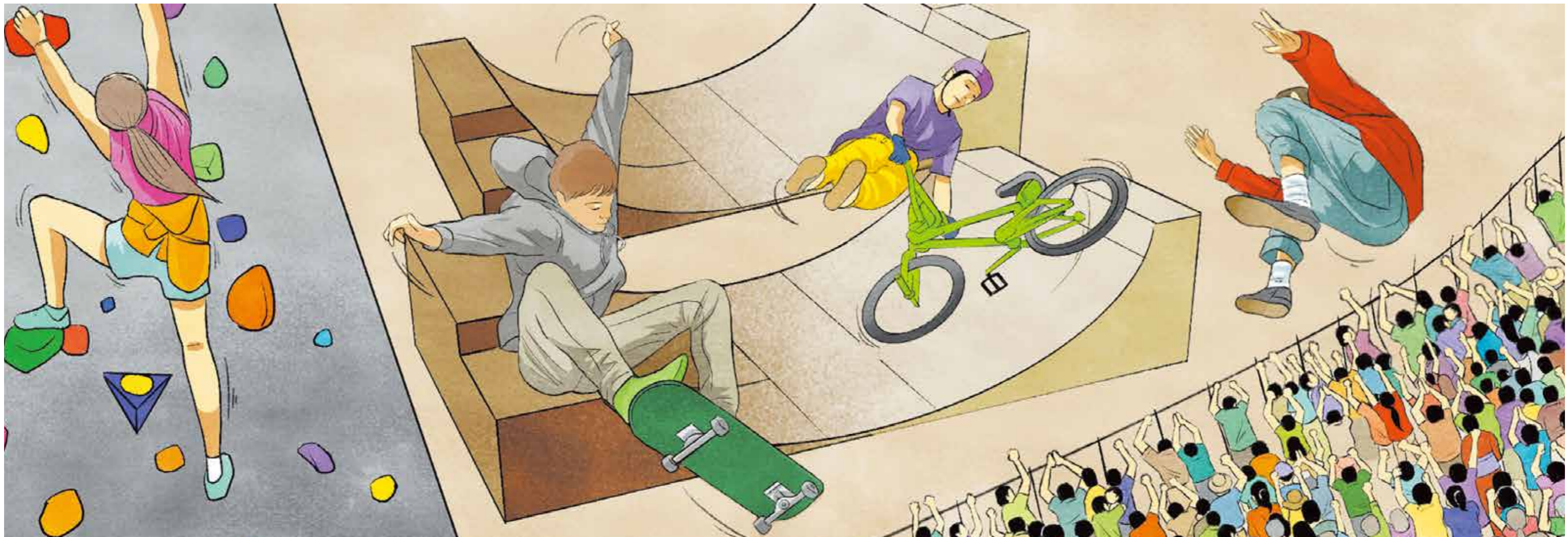
アーバンスポーツを福岡から世界へ!

「アーバンスポーツ」は、その名の通り「都市で行うスポーツ」で、その舞台は私たちが日々暮らしている「都市」です。運動場や競技場がなくても、広場や小さな公園がそのまま会場になります。

東京2020オリンピックに採用されたスケボーやBMX、スポーツクライミングだけでなく、パルクールやブレイキン(ダンス)など世界からも注目される競技でもあり、若年層の競技人口が多いとされています。また、音楽やファッション、アートなど若者文化が融合したものとして、従来のスポーツの枠を超えた領域に展開するものであり、スポーツという側面に拘らず、遊び、カルチャーの延長線上に捉えているという側面もあります。競技者は子供達からプロ選手まで広範囲で実施可能であり、皆が同じフィールドで練習に取り組む等、風通しの良さがあると考えられます。

福岡市は15歳～29歳までの人口率が17.6%と、日本における大都市の中でも若者の割合が最も高く、また、ストリートカルチャーも盛んであるため、アーバンスポーツが盛り上がる土壌があると言えます。どこでも気軽にできるアーバンスポーツは、スポーツ離れする子供達にとって貴重な運動の機会となり、運動機能向上につながります。広場や公園にある遊具を使った新しい遊びを楽しむ子供達の姿が、どこにでも見られるようになるでしょう。

福岡のまちにアーバンスポーツを浸透させ、子供達のチャレンジの機会をつくるべく、具体的には「する」機会と「みる」機会を創出します。



～「アーバンスポーツ」の聖地FUKUOKA～

「する」機会

誰でも気軽にアーバンスポーツを行うことができる施設「アーバンスポーツパーク」を造ります。市内のあまり使われていない公園を小型の「アーバンスポーツパーク」にします。球技をするには狭い公園を利用して、市内のどこでもスケボーやパルクールなどを気軽にプレイできるような環境を創出します。また、最も人が集まりやすい場所の1つでもあり、広大なスペースを有するショッピングセンターの屋上駐車場に「アーバンスポーツパーク」を造ります。

公園より広くとれる屋上パークでは、スケートボードやBMXを楽しむ若者で賑わうと共に、選手達のトレーニング施設としても活用されます。福岡は各地域に大型ショッピングセンターが乱立し、周辺に住んでいる若者にとってはアクセスしやすい場所であるため、アーバンスポーツをする機会が増え、福岡市中にアーバンスポーツの波が広がることで、世界で戦える若手選手を輩出できるまちになります。

「みる」機会

大規模なアーバンスポーツの国際大会を誘致します。百道エリア(マリゾンやpaypayドームの周囲)や雁ノ巣レクリエーションセンター、ベイサイドなどではスケボーやBMXの有名選手が世界中から集まります。

中洲の博多川河川沿いでは、パルクールの選手が様々な障害物を飛び越えて疾走し、夜のネオンまちは大きく違う活気あるエリアになります。

高さ制限が緩和された天神や博多の高層ビルの壁で、スポーツクライミングの世界大会が定期的開催されます。

大規模な国際大会を誘致することで、「みる」機会を提供でき、アーバンスポーツのファンづくりや世界中との交流ができます。

短期:アーバンスポーツの浸透

アーバンスポーツの機運を高めるために、小学校にアーバンスポーツの授業を選択制で採用。安全面にも配慮し、まずは、運動場にある遊具を使ってできるものを実施していきます。授業では、講師としてアーバンスポーツ選手にお願いすることにより、選手の活躍の機会が増えると共に、周知活動も兼ねることができるようになります。

中期:アーバンスポーツの国内大会開催

福岡市民に周知され始めたアーバンスポーツをさらに盛り上げるために、国内大会を開催します。スタジアム建設など大規模な開催を前提とすることなく、まずは福岡市や近隣の都市との国内大会などを行いながら、より多くの地域で大会が開催されるように推し進めていきます。実施に際しては、福岡市や地場企業と連携しながら実行委員会をつくり、まちをあげて大会を盛り上げます。

長期:アーバンスポーツの国際大会開催

福岡において国内大会が継続して開催されることで、福岡市民のアーバンスポーツへの熱は更なる高まりを見せ、その上で、国際大会を誘致します。福岡空港には、世界中からスケートボードやBMXなどの選手たちが続々と降り立ちます。夕方開催することで、仕事をしている大人も子供達を連れて観戦でき、会場ではお酒も提供され、出場選手のファンタスティックな技に大きな歓声が湧きます。



【アート・スポーツを国際色豊かな環境で学べる小中一貫校の設立】

福岡にアート・スポーツを恒常的に学べるグローバルな小中一貫校を設立します。通常の基礎教育を行いながら、アートでは通常の図工の授業とは違い、有名なアーティストが先生となり絵画だけでなく様々なアートを楽しみながら学ぶことができます。自由な発想力をさらに伸ばし、感性を磨くことができます。スポーツにおいては、アーバンスポーツを気兼ねなく楽しめる施設を校内に設置するとともに、パークール、BMX、スケートボードなどの学生が自分自身の興味のあるアーバンスポーツの種目をそれぞれの専門家から教わる機会を提供します。世界的に有名なアーティストやアーバンスポーツの専門家から直接教わることでできる小中一貫校は世界中からも注目を集めることになります。

日本人だけでなく世界中からもアートやアーバンスポーツに興味がある生徒を受け入れ、学校内では日本語だけでなく英語や中国語など様々な言語が飛び交い、文化も多様化していきます。生徒達は9年間をこの学校で学ぶことで「感性」「協調性」「国際性」を育みます。

私立の小中一貫校はありますが、学費が高いなどの理由で限られた子供たちにしかチャンスはありません。上記の学校を福岡市の公立校とすることで日本国内において初めて「アート」「スポーツ」に特化した小中一貫校となるでしょう。

ここで学んだ生徒は、アートやアーバンスポーツで活躍するだけでなく、校内で交流することができた世界中の仲間たちとネットワークができます。

そんな子供達は大人になった時に、アートやアーバンスポーツなど学んだことが直結する分野で活躍している可能性もありますが、そうではない時でも、今まで以上にグローバル化が進んだ社会においても臆することなく、自分の持つネットワークを存分に活かしながら活発に交流し、磨かれた感性から既存のビジネスからは想像できないようなビジネスモデルを生み出し、もっとワクワクする福岡を創造していきます。そんな福岡の未来を私たちとともに見てみませんか？

2030年の未来を描こう

あなたが想像する2030年の福岡のまちを自由に描いてください。
描いた絵は、#こども未来都市福岡でInstagramに投稿してね！
他の投稿から、みんなの想像する未来を見てみよう！



【編集後記】

「持続可能なまちFUKUOKA」とは。。。

JCI福岡がこれまでに2010年に「アジア交流首都宣言」、2016年には「グランドデザインFUKUOKA」、それ以前にも様々な提言をおこなってきました。振り返って拝見させていただくと、当時のまちの経済、芸術、産業など、見えてくる世の中の流れを掴み、福岡市は近年世界でも注目される都市へと成長を続けています。

しかし、2020年から続く新型コロナウイルス感染症の影響により、その時に想像していたまちの未来、世の中の流れは、様々な分野で良い面でも悪い面でも大きく変化しています。インバウンドによる大きな経済発展を遂げていたまちは大きな打撃を受けましたが、ニューノーマルの生活様式、目覚ましい技術革新による産業構造の変化、これまでになかった新しい価値観が生まれ、私たちの生活に大きな影響を与えました。これから歩いていく時代において、変えていくべきものとそうでないものを選び分け、5年先、10年先、そしてもっと先の未来へ。

福岡に生まれ育ち住んでいる人々が、福岡の環境を求め市外県外から移り住んでくる人々が、変わらず愛し続けることができる持続可能なFUKUOKAのまちを想像しながら調査研究を積み重ね、未来への期待をこめて、この提言書の作成に至りました。どんな未来が私たちを待っているのかは誰にも分かりません。しかし、「想像」は新たな「創造」を生み出し、新しい時代を作っていくはず。このまちに暮らす人々が創っていく未来が、ワクワクする明るい豊かな社会となり、次の世代、また次の世代が皆、愛するようなまちになることを、心から願っております。

最後に、この提言書作成に関わっていただいた多くの方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。

2022年11月

未来デザイン創造委員会

委員長 福島 卓

委員長 福島 卓
副委員長 伊東 健太郎
総括幹事 池尻 将悟
運営幹事 小菅 良助
会計幹事 野満 圭介
広報・拡大幹事 末永 純也
出向理事 立部 真康
委員 吉村 友佑
川嶋 潔典
岩下 優典
熊谷 平助
合谷 賢太
扨山 哲平
山下 正太
進藤 貴聡
竹田 一国

発行日：2022年11月14日

発行：一般社団法人福岡青年会議所

〒812-0021 福岡市博多区築港本町13-6
ペイサイドプレイス博多C 棟3F

TEL：092-263-6333

FAX：092-263-6334

<http://www.fukuoka-jc.or.jp/>

発行責任者：一般社団法人福岡青年会議所

発行部数：1,000部

編集：未来デザイン創造委員会

デザイン：PROJECT ARTS TRAP

イラスト：YUYA KAI